

歌を通じて多くの出会い



「歌手の牛来さんですよね」。そんなふつに声をかけていたことが増えてきた。テレビや新聞などで私のことを知ってくださる方も多い。

誰も知らずにたどり着いた群馬で、地道に震災を伝えるため必死で歌い続けた先に、声をかけてもらうことが増えるのはうれしい。娘と2人で福島県浪江町から避難してきて、何も分からないまま始まった仮の生活と、その中で伝えるために歌うと決心した道を振り

シンガー・ソングライター

牛来 美佳



返ると、怒濤の11年間で、全てが手探りだった。

私たちが経験した東日本大震災、東京電力福島第一原発事故による全町民に対する避難指示。強制的に町から人がいなくなるという現実、思っている以上にこたえた。初めて本当の「無力さ」を、身をもって経験した。

ごく普通の当たり前の日常。それが突然、閉ざされるといふことは、人生そのものを180度覆されることと同じだ。母子家庭で育てている娘との生活。少し車を走らせれば実家があり、祖父母や親戚、友人の家がある。自分の母校に娘が通う日が来ることもふんわりと描く。そんな毎日とともに、

浪江町で生きていた。それを思うと、やはりごく普通の日々が愛おしく、失ったたくさんのモノたちが教えてくれたことが私の歌には反映されている。

「いつかまた浪江の空を」という楽曲は、震災前の2009年に浪江町で開催された音楽イベントで出会った音楽家の山本加津彦さんと共作した。少し先の未来に希望を込め、青々としたきれいな空の下でまた浪江町の人たちが会えるようにとの願いを託した。

ただ、この楽曲が実際に完成した13年頃、歌い込む中でふと疑問が浮かんだ。震災から2年、現状はあの日のまま置き去りで、朽ち果てた町は心を締め付ける。今を伝えたいという思いと、「いつかまた浪江の空を」に込める思いは交わることがなかった。結局、歌おうとしても歌えず、

イントロが流れるだけで拒絶するようになり、この楽曲から離れた。ただ、その後に音楽活動を続けた中で気づいたことがある。震災がなければ、出会えなかった人たちがいることだ。歌うことを通じて出会い、支えてくださる多くの人たちのことを思いながら、いつか浪江の空の下で当たり前の日常があふれる日を見たいと考えるようになっていた。いつしか思いは交わり、15年からライブなどで披露するようになった。

震災から11年が経過し、皆さんの前で歌うようになってから7年の月日を経て、「いつかまた浪江の空を」が3月11日にキングレコードから配信リリースされた。こうして世に送り出したのも、群馬で出会った多くのご縁が関わっている。だから私はまだまだ歩き続ける。出会いに感謝しながら。

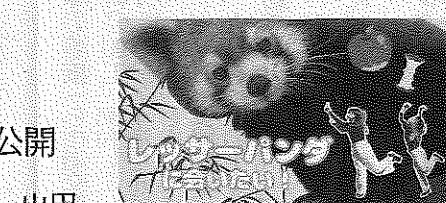
お母さんたち魂の歌声

前橋と高崎で活動する女性ゴスペル合唱団。インターネッ卜上の子育て掲示板で意気投合した母親たちが2010年に結成した。サークル名はハワイ語の「良き知らせの音」を意味する「Kōwhiri」。メンバーは30〜50歳代の約40人。毎週1回午前中の練習に励む。子育て中の母親もおり、子連れでの参加も歓迎している。代表の杉山有紀さん

群馬の輪
「前橋、高崎市」

千葉心結 出演イベント

6月5日に高崎市の観音山ファミリーパークで行われる「HYGGE TIMES Special 覆面GIRMANIA vol.2」でパフォーマン



ランちゃん(1歳)の個性豊かな3頭です。動画では、3頭がレッサーパンダ舎を回る姿や、リンゴを飼育員へ届けます。可愛い姿を飼育員へ届けます。癒やされてみませんか？